
SHOCK～衝撃、もじゃもじゃ毛～

雁木四間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHOCK（衝撃、もじやもじや毛）

【Nコード】

N8498J

【作者名】

雁木四間

【あらすじ】

アイツと俺は公園で出会った。猫が公園にいた。

(前書き)

S H O C Kを辞典で調べたら、もじゃもじゃ毛って意味があった。
どういうことだ？

もじゃもじゃ毛は本編にまったく関係ありません。

俺は宰治高校までの道のりを自転車通勤する。なぜかと問われれば、自宅から駅までの距離が長く。俺はバスが嫌いなためだ。深い理由は無い。

今日、俺が学校帰りに公園に自宅へ帰るルートを外れて立ち寄ったのにも深い理由は無い。

アイツが明日、転校してしまうのも、まったくもって関係が無い。

公園はそこにあった。けれど、そこには俺が知る公園とは少し違っていた。

遊具が新しくなっている。俺が足を折りかけたブランコは支えの骨組みは同じだがブランコの腰掛ける部分と鎖はまったくの別物だ。滑り台は俺が知る青いものではなく、黄色と蛍光色のピンクのツートンカラーの滑り台が以前からそこにあったかのようにふんぞり返っている。

俺が前歯を砕きかけたジャングルジムは跡形も無くなっている。

公園などの公共施設は税金で改装されているのだろうか？

それとも心やさしい人からの寄付？

どちらにしても思い出を破壊された気分になってしまう俺がいた。

ベンチは以前と同じだ。俺はベンチに腰を下ろす。そして空を見上げる。曇りだった。ハズレだな。

ふ と気が付くと方位60度仰角—40度の位置に猫がいた。
猫はなんとなくだがアイツ似ている気がした。

俺は立ち上がり猫に近づく。猫が後退した。俺はしゃがみこみ猫を
にらむ。手を伸ばす。

猫が後退した。

俺はむっとして立ち上がる。自分から近づいたくせに先に離れるの
はいつも近づいた側だ。

帰ろう

そう思った

俺は自転車にまたがった。すると猫が自転車の後ろのタイヤの上の
荷物を置いたり、二人乗りの椅子になる部分に跳び乗ってきた。

猫は本気を出せば2メートル跳ぶと言うのは本当なのだろうか？

と考えていたら猫は荷台から跳び降りた。

アイツと出会ったのもこの公園だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ここに来るのは小学生の時以来だ。
俺は久しぶりに公園に来ている。深い理由はない。公園の遊具は俺が何度も遊んだものばかりだ。何も変わっていない事に安心感を覚える。

『ねえちよつとちよつと』

女の子の声がした。

振り向くと黒髪パツツンの女がいた。

俺はややにらみつけながら言う。

『なに？』

臆さず女が話しかけてきた。

『なにやってんの？』

『そっちこそなにやってんだ？』

『疑問文に疑問文を返すとか、テストで点は貰えないよ』

『…ここ小学生の時までよく遊んでたんだ』

『ふーん、過去形？』

『最近はめっきり来なくなったから…』

『懐かしくなったんだ』

そう言ってアイツは嬉しそうに微笑んだ。60点だな、と思った。

『そんなんじゃないよ、深い理由は無い』

『じゃあ、絶対に、また戻って来ちゃうよ』

『多分もう来ないよ』

『そう？』

『そうだよ』

『中学生？』

『そうだよ』

『何年生？』

『3年』

『あたしも』

『…』

『学校は？』

『1中』
いちちゅう

『あたしは3中』
さんちゅう

なぜかアイツは嬉しそうに言う。

俺はアイツと話すのにこの短時間で飽き飽きしていた。

アイツは何も悪くない、俺が飽きただけだ。

ちゃちゃっと帰ろうと思った。

『じゃ、俺、帰るから…』

『じゃあ自転車乗せてよ、そこまで』

俺の脇の自転車を指差し、また微笑んだ。俺はシカトすることにした。自転車にまたがり、アイツに背をむけペダルを踏み出した。

『ほっ』

後ろで声がした。次の瞬間、自転車に負荷がかかった。

なんとアイツは俺の自転車に飛び乗ったのだ。
しかも普通に乗ればよいものをアイツは跳んだ勢いを殺せず負荷が横にかかる。

『っうおおーい！！』

『ひゃわああああ！！』

俺は衝撃を支える事が出来ずに自転車と俺とアイツで三位一体となり、コンクリートに倒れた。

『バカじゃねえの！？』

『めんごめんご』

『なんで笑ってんだよ』

『自転車でこんな転んだのはじめて』

『知るか』

『あっ』

『なんだよ』

『血い出てる』

見るとアイツの膝には擦り傷ができている。
めんどくさいことになった。

俺は消毒液やらガーゼやらを買ってきて丁寧に手当てしてやった。
させられた。

そして自転車の荷台を占領され家まで送るはめになった。

『最悪だ』

『どーしたんだね？元気が無いゾ？？』

『…』

『いやはや、わかったとは思うよ』

『…』

『否定しないからてっきり乗れって言ってるのかと』

『そんなわけないだろ』

『男は背中で語ると言うし』

『勝手な解釈をするな』

『ごめんなさい』

『…』

『…そこ右』

『ハイハイ』

『…』

『…』

『ねえ、また会えるかな？』

『俺は会いたくない』

『ひどっ』

『…』

『あ、ここだよあたしん家』

『そうか』

俺はブレーキをゆっくり踏む。アイツは跳び降りた。

『じゃあ』

『む』

俺はろくにアイツの顔を見ずにペダルを踏み出した。

だいぶたってから、名前を聞いていないことに気付いた。もう会わないと思うていたら高校が同じだった。

☆
✱
☆
✱
☆
✱
☆
✱
☆

猫はしっぽをふりふりしながら俺の視界から消えた。
やっぱアイツに似てるな。俺は少し笑った。

(後書き)

アイツと神崎の話、2話になるのかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8498j/>

SHOCK～衝撃、もじゃもじゃ毛～

2010年10月21日23時50分発行